

佐賀新聞 2010(平成22)年1月9日(土) 県内文化欄 連載「近代との遭遇 世界を見る・日本を創る」

スポット SPOT

## 近代との遭遇

世界を見る・日本を創る

幕末から明治にかけて日本の近代化に貢献した佐賀人の熱い息吹を紹介する「近代との遭遇―世界を見る・日本を創る」が、県立美術館で開かれている。歴史と美術の視点から展開する同展の魅力を担当した学芸員に案内してもらおう。

フランスへ留学

岡田三郎助は日本近代の洋画家のなかで、「美人画家」すなわち女性像を多く描いた画家として知られる。なかでも裸婦を描いた作品は日本近代美術史においてひときわ光彩を放っている。岡田は1897(明治

# 女性の肌典雅に表現



岡田三郎助「花野」1897(大正6)年

県内文化

### 美の典型―岡田三郎助の裸婦像―

30年、西洋画研究の第1回の文部省留学生としてフランスに留学する。4年半におよぶ研鑽を終え、帰国後は東京美術学校西洋画科教授、文展(文部省美術展覧会)の審査員、帝室技芸員などを経て、1937(昭和12)年第1回文化勲章を受章する。

この画歴からわかるように、岡田は明治、大正、昭和の三代を代表する画家であった。アカデミズム(国家主導の美術教育および展覧会制度)の頂点に立つ者として、彼が描くテーマは画壇のひとつ一つの指標となり、風景画、人物画いずれにおいても典型的と言え、様式の美が生まれた。そして、そのことがはっきりと示されているのが、裸婦像にみる横向き、後ろ向きの作品だったのである。

## 大理石に光差す色合い

留学中、岡田はサロン洋美術史の歩みに即し(フランスの官設展の大で、イタリヤ・ルネサンス家ラファエル・コランに)からフランス新古典主義学び、コラン作品の特色義の流れに傾き、とりである典雅な裸婦表現をわけフランス19世紀の画受け継いだ。第11回文展家アングルの裸婦像から出品となる『花野』は大きな影響を受けた。そうした特徴をよく表し、大理石の肌を持つアンというと言え。また、岡田の浴女たち。しかし田は当時のパリにあって、岡田の裸婦像は、石の冷て、コラン自身、いや、西たさではなく、光が染み敗そのものがその未磨である肌となり、背景となる古代ギリシャ・ローマ時代のまで、遡る古典森の緑や海の色がさまざまな光となって入り交様式に絵画制作の範を求めた。そこにおいて見いだした様式が裸婦の背面像であり横向きすなわちプロフィールであった。岡田は「色が見え過ぎる像であり横向きすなわちアングルから影響を受けているが、女性の肌がのびやかにひろがる裸身に、その背中にさまさまな色合いを見ていた。彼が描いた裸婦像が油彩での變の流れるような美しあるにもかかわらず、パサ、また、古代ギリシャステルで描いた趣があるの金、銀貨に横向きに浮のは、まさにこの精緻な彫された人物像の輝き色の見え方を如実に教えは、岡田が求める古典様式の原点と言えるもので(県立博物館・美術館副ある。さらに岡田は、西館長 松本誠)

佐賀城本丸歴史館の開館5周年を記念した特別展「近代との遭遇」は2月14日まで県立美術館で開催。1月12日と25日、2月8日は休館。観覧料は一般1000円、大学生800円、高校生以下と障害者は無料。問い合わせは佐賀新聞社事業部、電話0952(28)2151へ。



岡田三郎助「後向きの裸婦」1897(大正中)